

クラスDハミルトニアンの諸性質

塩崎 謙

January 13, 2024

Abstract

1 準備

このノートの目的は、ギャップのある2次元のハミルトニアン $H(\mathbf{k})^\dagger = H(\mathbf{k})$, $\mathbf{k} = (k_x, k_y)$ が各点でクラスDの対称性

$$U_C H(\mathbf{k})^T U_C^\dagger = -H(\mathbf{k}), \quad U_C^T = U_C, \quad (1)$$

を満たすとき、Chern数 $ch_1 \in 2\mathbb{Z}$ 証明することである。波数を変化させないから、この対称性は C_2C つまり、 C_2 回転とPHSを組み合わせた対称性である。一般には上記の U_C は \mathbf{k} 依存するが、簡単のため、 U_C は \mathbf{k} 依存しないものとする。 $H(\mathbf{k})$ は $2n \times 2n$ 行列とする。

ハミルトニアンは平坦化、つまり、固有値は ± 1 に断熱変形されているものとする。

U_C は複素対称行列であるので、 U をユニタリ行列として、 $U_C = UU^T$ と書くことができる、この U で基底変換すると、ハミルトニアンの対称性は

$$H(\mathbf{k})^T = -H(\mathbf{k}) \quad (2)$$

である。 $A(\mathbf{k}) = iH(\mathbf{k})$ を導入すると、 $A(\mathbf{k})$ は実反対称行列である。

$$A(\mathbf{k})^* = A(\mathbf{k}), \quad A(\mathbf{k})^T = -A(\mathbf{k}). \quad (3)$$

行列 $A(\mathbf{k})$ は直交行列 $Q(\mathbf{k})$ を用いて以下のように書かれる。

$$A(\mathbf{k}) = Q(\mathbf{k})i\tau_y Q(\mathbf{k})^T, \quad Q(\mathbf{k}) \in O(2n). \quad (4)$$

$Q(\mathbf{k})$ はゲージ不定性がある。

$$Q(\mathbf{k}) \mapsto Q(\mathbf{k})V(\mathbf{k}). \quad (5)$$

ここで、 $V(\mathbf{k}) \in O(2n)$ であり、

$$[i\tau_y, V(\mathbf{k})] = 0 \quad (6)$$

を満たす。解くと、

$$V(\mathbf{k}) = \begin{pmatrix} a(\mathbf{k}) & b(\mathbf{k}) \\ -b(\mathbf{k}) & a(\mathbf{k}) \end{pmatrix}, \quad a(\mathbf{k}), b(\mathbf{k}) \in \text{Mat}_{n \times n}(\mathbb{R}), \quad (7)$$

$$a(\mathbf{k})a(\mathbf{k})^T + b(\mathbf{k})b(\mathbf{k})^T = 1_n, \quad a(\mathbf{k})b(\mathbf{k})^T - b(\mathbf{k})a(\mathbf{k})^T = 0, \quad (8)$$

である。

$$U(\mathbf{k}) = a(\mathbf{k}) + ib(\mathbf{k}) \quad (9)$$

とすると、 $U(\mathbf{k})U(\mathbf{k})^\dagger = 1_n$ と等価である。逆に、与えられた $U(n)$ 行列 U から $a = \text{Re}U = (U + U^*)/2$, $b = \text{Im}U = (U - U^*)/(2i)$ とすると、上の性質を満たす。よって、ゲージ自由度は $U(n)$ 群である。埋め込み $U(n) \rightarrow O(2n)$ を明示すると、

$$U(n) \ni U \mapsto \begin{pmatrix} \text{Re}U & \text{Im}U \\ -\text{Im}U & \text{Re}U \end{pmatrix} \in \text{SO}(2n). \quad (10)$$

$V(\mathbf{k}) \in \text{SO}(2n)$ に注意。

2 ゲージ自由度とChern数

$U_C = 1$ とする.

$$A(\mathbf{k}) = Q(\mathbf{k})i\tau_y Q(\mathbf{k})^T \quad (11)$$

とする. ハミルトニアンは

$$H(\mathbf{k}) = -iA(\mathbf{k}) = Q(\mathbf{k})\tau_y Q(\mathbf{k})^T \quad (12)$$

であり, 占有状態は局所的に

$$U_-(\mathbf{k}) = Q(\mathbf{k})\frac{1}{\sqrt{2}}\begin{pmatrix} 1 \\ -i \end{pmatrix} \quad (13)$$

で与えられる. すると $U(1)$ 接続は

$$A = \text{tr}[U_-^\dagger dU_-] = \frac{1}{2}\text{tr}[(1 - \tau_y)Q^T dQ] = \frac{1}{2}\text{tr}[Q^T dQ] - \frac{1}{2}\text{tr}[\tau_y Q^T dQ] \quad (14)$$

$$= \frac{1}{2}d \log \det Q - \frac{1}{2}\text{tr}[\tau_y Q^T dQ] = -\frac{1}{2}\text{tr}[\tau_y Q^T dQ]. \quad (15)$$

ゲージ変換 $Q \mapsto QV$ に対して,

$$A \mapsto A - \frac{1}{2}\text{tr}[\tau_y V^T dV]. \quad (16)$$

$$V = \begin{pmatrix} \text{Re } U & \text{Im } U \\ -\text{Im } U & \text{Re } U \end{pmatrix}, U \in U(n) \quad (17)$$

を代入すると,

$$-\frac{1}{2}\text{tr}[\tau_y V^T dV] = -i\text{tr}[(\text{Re } U)^T d\text{Im } U - (\text{Im } U)^T d\text{Re } U] = -d \log \det U. \quad (18)$$

すると, 球面 S^2 上のChern数は, 赤道のゲージ変換を $U(\phi) \in U(n)$ として,

$$ch_1 = \frac{1}{2\pi i} \oint d \log \det U \quad (19)$$

となる.

3 $ch_1 \in 2\mathbb{Z}$ の証明

$ch_1 \in 2\mathbb{Z}$ であることが以下のように証明される.

ホモトピー完全列より, $n \geq 2$ のとき,

$$0 \rightarrow \pi_2[O(2n)/U(n)] \xrightarrow{2} \pi_1[U(n)] \xrightarrow{\text{mod } 2} \pi_1[O(2n)] \rightarrow 0. \quad (20)$$

であるので,

$$U(n) \ni U \mapsto V = \begin{pmatrix} \text{Re } U & \text{Im } U \\ -\text{Im } U & \text{Re } U \end{pmatrix} \in O(2n) \quad (21)$$

で決まるループが自明な基本群に属することを示せば良いが,

$$V'(\phi, \theta) := Q_S(\pi - \theta, \phi)^T Q_N(\theta, \phi), \quad \theta \in [0, \frac{\pi}{2}], \quad (22)$$

とすると $V(\phi)$ は1点 $V(0, \phi) = Q_S(\pi, \phi)^T Q_N(0, \phi)$ にホモトピック。¹

次に、トーラスの場合を考える。 $\pi_0[O(2n)] = \mathbb{Z}_2$ であり、 $\det Q \in \pm 1$ で特徴づけられるが、ギャップレス点の不在は $\det Q$ が T^2 全体で一定であることを意味する。 よって、 T^2 上の任意のループ C に対して、 $Q(\phi) \in O(n), \phi \in C$ が定まる。 k_x 方向に $k_x \in S^1$ 全体で連続なゲージを取る。 k_y 方向は区間 $k_y \in [0, 2\pi]$ において連続なゲージを取ることができる。 すると、 変換関数

$$V(k_x) = Q(k_x, 0)^T Q(k_x, 2\pi), \quad k_x \in S^1, \quad (23)$$

が定まる。 すると、 $\pi_1[O(2n)]$ の元として、 $[V] = -[Q(k_y = 0)] + [Q(k_y = 2\pi)]$ であるが²、 $Q(k_x, k_y)$ がホモトピー同値 $Q(k_y = 0) \sim Q(k_y = 2\pi)$ を与えるので、 $[V] = 0$ 。 よって、 $V(k_x)$ はnull homotopicである。

4 模型

Dirac模型を考える。 $\gamma^* = \gamma, \gamma^T = -\gamma$ を満たす互いに反可換な行列は、 2×2 だと $i\tau_y$ のひとつ、 4×4 だと $i\sigma_y, i\sigma_x\tau_y, i\sigma_z\tau_y$ の3つある。 よって S^2 上のDirac模型の行列次元は 4×4 が最小。

模型は

$$H(\mathbf{n}) = \mathbf{n} \cdot (\sigma_x\tau_y, \sigma_y, \sigma_z\tau_y) = e^{-i\phi\sigma_z\tau_y/2} e^{-i\theta\sigma_y/2} \sigma_z\tau_y e^{i\theta\sigma_y/2} e^{i\phi\sigma_z\tau_y/2}. \quad (24)$$

このとき、

$$A(\mathbf{n}) = iH(\mathbf{n}) = e^{-i\phi\sigma_z\tau_y/2} e^{-i\theta\sigma_y/2} \sigma_z\tau_y e^{i\theta\sigma_y/2} e^{i\phi\sigma_z\tau_y/2} \quad (25)$$

$$= e^{-i\phi\sigma_z\tau_y/2} e^{-i\theta\sigma_y/2} (\tau_0 \oplus \tau_z) (1 \otimes i\tau_y) (\tau_0 \oplus \tau_z) e^{i\theta\sigma_y/2} e^{i\phi\sigma_z\tau_y/2}. \quad (26)$$

よって、

$$Q(\mathbf{n}) \sim e^{-i\phi\sigma_z\tau_y/2} e^{-i\theta\sigma_y/2} (\tau_0 \oplus \tau_z) \quad (27)$$

である。 この表示は $\theta = 0, \pi$ で連続的にはない。 $U(2)$ ゲージ変換を用いて、 北半球と南半球でそれぞれ連続な $Q_N(\mathbf{n}), Q_S(\mathbf{n})$ は

$$Q_N(\mathbf{n}) = e^{-i\phi\sigma_z\tau_y/2} e^{-i\theta\sigma_y/2} (\tau_0 \oplus \tau_z) e^{i\phi\tau_y/2} = \begin{pmatrix} \cos \frac{\theta}{2} & -e^{-i\phi\tau_y} \sin \frac{\theta}{2} \tau_z \\ e^{i\phi\tau_y} \sin \frac{\theta}{2} & \cos \frac{\theta}{2} \tau_z \end{pmatrix}_\sigma, \quad (28)$$

$$Q_S(\mathbf{n}) = e^{-i\phi\sigma_z\tau_y/2} e^{-i\theta\sigma_y/2} (\tau_0 \oplus \tau_z) e^{-i\phi\tau_y/2} = \begin{pmatrix} e^{-i\phi\tau_y} \cos \frac{\theta}{2} & -\sin \frac{\theta}{2} \tau_z \\ \sin \frac{\theta}{2} & e^{i\phi\tau_y} \cos \frac{\theta}{2} \tau_z \end{pmatrix}_\sigma. \quad (29)$$

赤道における変換関数は

$$V_{NS}(\phi) = Q_S(\theta = \frac{\pi}{2}, \phi)^T Q_N(\theta = \frac{\pi}{2}, \phi) = e^{i\phi\tau_y} = \begin{pmatrix} \cos \phi & \sin \phi \\ -\sin \phi & \cos \phi \end{pmatrix}_\sigma. \quad (30)$$

よって、 $U(2)$ 行列は

$$U(\phi) = e^{i\phi} 1_2 \quad (31)$$

であり、 巻き付き数は2である。

接続も計算しておく。

$$Q_N^T \partial_\phi Q_N = i\sigma_0 \tau_y \sin^2 \frac{\theta}{2} - i\sigma_y \tau_x e^{i\phi\tau_y} \cos \frac{\theta}{2} \sin \frac{\theta}{2}. \quad (32)$$

すると、 τ 空間だけトレースを取ると、

$$\text{tr}_\tau \left[\frac{1 - \tau_y}{2} Q_N^T \partial_\phi Q_N \right] = -i\sigma_0 \sin^2 \frac{\theta}{2}. \quad (33)$$

¹この証明方法は窪田さんに教えていただきました。

²これは安定ホモトピー群の範囲内でのみ証明可能？ $Q_1 Q_2 \oplus 1_{2n} \sim Q_1 \oplus Q_2$ であるが..

より, $U(1)$ の接続は

$$\mathcal{A}_{N,\phi} = -2i \sin^2 \frac{\theta}{2}. \quad (34)$$

すると, Berry位相は

$$\gamma(\theta) = \arg e^{\oint \mathcal{A}_N} = -4\pi \sin^2 \frac{\theta}{2} \quad (35)$$

となり, Berry位相の巻き付きは偶数である.

さて, $\gamma(\theta)/2$ がwell-definedにできるか?

5 Berry位相

$H(\phi) = Q(\phi)\tau_y Q(\phi)^T$ を1点にホモトピックなハミルトニアンとする. ホモトピーを $Q(\phi, t \in [0, 1])$ とする. D^2 上の曲率を

$$\mathcal{F} = d\mathcal{A}, \quad \mathcal{A} = \text{tr} \left[\frac{1 - \tau_y}{2} Q^T dQ \right] \quad (36)$$

とする. Berry位相を

$$e^{i\gamma} = e^{\frac{1}{2} \int_{D^2} d\mathcal{A}} \in U(1) \quad (37)$$

と定義すると, ホモトピーの取り方に依存しないためwell-defined.

これを離散点のハミルトニアンのデータから計算したい.

... 保留.

6 分解 $U_C = UU^T$ について

各点で(高木)分解 $U_C = UU^T$ は実行できるが, パラメータ族 $U_C(\mathbf{k})$ がパラメータ空間全体で分解できるかどうかは, 一般には障害が存在する.

$U_C \in U(n)$ を対称行列 $U_C^T = U_C$ とする. 分解 $U_C = UU^T$ は, 変換

$$U \mapsto UO, \quad O \in O(n) \quad (38)$$

に対して不変である. 同値類を

$$[U] \in U(n)/O(n) \quad (39)$$

と書く. 切断

$$U(n)/O(n) \rightarrow U(n), \quad [U] \mapsto U \quad (40)$$

を大域的に取ることができるのは, $U_C \mapsto [U]$ で定まる $O(n)$ 束が自明である場合のみである.

大域的な $U(\mathbf{k})$ が存在しない場合がある. 実際,

$$\pi_1[U(n)] = \mathbb{Z} \rightarrow \pi_1[U(n)/O(n)] = \mathbb{Z} \quad (41)$$

は2倍写像であるので, $\pi_1[U(n)/O(n)] = \mathbb{Z}$ の奇数元に対応する $U_C(\mathbf{k})$ は連続な分解 $U(\mathbf{k})$ を持たない. 最も簡単な例は S^1 上の 1×1 行列

$$U_C(k \in S^1) = e^{ik} \quad (42)$$

である. $k \in S^1$ の各点で

$$U_C(k) = e^{ik/2} e^{ik/2} \quad (43)$$

という分解は可能であるが、 S^1 全体で連続な $U(k)$ は存在しない。

$U_C(k) = e^{ik}$ の場合のハミルトニアンに対する制限について考えよう。

$$U_C(k)H(k)^*U_C(k)^\dagger = -H(k) \quad (44)$$

は

$$H(k)^* = -H(k) \quad (45)$$

であるが、今は 1×1 模型であるので、全ての点 $k \in S^1$ で $H(k) = 0$ が示される。 $U_C(k) = 1$ でも同じ結果である。この点は実空間描像で理解できる。反ユニタリな対称性 $U_C(\mathbf{k})$ は波数を変化させないため、空間反転と（局所的な）PHSの組み合わせである。 1×1 模型の場合は反転中心が $x = 0, 1/2$ の2通り存在し、それぞれ $U_C = 1, e^{ik}$ に対応する。反転中心においてPHS型の対称性が存在するため、ハミルトニアンは0に固定される。

一方で、ギャップのあるハミルトニアン $H(\mathbf{k})$ に興味がある場合は、「 $U_C(\mathbf{k})$ は占有状態と非占有状態を入れ替える」という制限があるため、 $O(n)$ 束 $U_C(\mathbf{k}) \rightarrow [U(\mathbf{k})]$ は自明束である、と予想される。例として、空間1次元で、実空間上の局在軌道に対して $U_C(k)$ を定義する場合を考えると、反転中心が0であれば

$$U_C(k) = \begin{pmatrix} & 1 \\ 1 & \end{pmatrix}. \quad (46)$$

一方で反転中心が $x = 1/2$ であれば

$$U_C(k) = e^{-ik} \begin{pmatrix} & 1 \\ 1 & \end{pmatrix} \quad (47)$$

である。後者は一見大域的な $U(k)$ が存在しないように思われるが、 $U_C(k)$ の巻き付き数は2であるので、大域的な $U(k)$ が存在する。実際、

$$U(k) = \begin{pmatrix} 1 & \\ & e^{-ik} \end{pmatrix} e^{\frac{\pi}{4}i\tau_x} e^{-\frac{\pi}{4}i} \quad (48)$$

とすれば良い。

予想：

- $U_C(\mathbf{k}) \mapsto [U(\mathbf{k})]$ が定める $O(n)$ 束が非自明であれば、 $U_C(\mathbf{k})H(\mathbf{k})^*U_C(\mathbf{k})^\dagger = -H(\mathbf{k})$ なる対称性を持つハミルトニアン $H(\mathbf{k})$ はフルギャップであり得ない。

7 計算メモ：実空間AHSS

雑な議論だが実空間AHSSを用いると $ch_1 \in 2\mathbb{Z}$ が示される。第2微分 $d_{2,-2}^2 : \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}_2$ は2セルのクラスAのDiracハミルトニアン

$$H = \begin{pmatrix} & -i\Delta e^{i\theta(x,y)}(\partial_x - i\partial_y) \\ -i\Delta e^{-i\theta(x,y)}(\partial_x + i\partial_y) & \end{pmatrix} + m\sigma_z \quad (49)$$

が $(C_2C)^2 = 1$ の場合にゼロ状態を強制されるかどうかを調べれば良い。例えば $C_2C = \sigma_x$ とすると位相 $e^{i\theta(x,y)}$ に課される対称性は

$$e^{i\theta(-x,-y)} = -e^{i\theta(x,y)} \quad (50)$$

であるから、 π -vortexが強制されるため $d_{2,-2}^2$ が非自明となり、 $ch_1 \in 2\mathbb{Z} - 1$ は実現しない。